

霧島錦江湾国立公園

報告者：環境省九州地方環境事務所 国立公園保護管理企画官 川瀬翼

霧島錦江湾国立公園はわが国最初の国立公園の1つになる。大きく3地域に分かれていて、北から霧島地域、中部の桜島・錦江湾奥地域、南部の指宿・佐多地域で、それぞれの火山景観が楽しめる。関係市町村は2県にまたがる8市3町になり、各自治体に協力いただき満喫プロジェクトを進めている。利用状況としては、火山景観の鑑賞、温泉、登山、キャンプ、霧島神宮に代表される参拝などで、利用者数は平成25年で1,210万人となる。訪日外国人利用者数は、推定で、平成27年に7.1万人でそのうちアジア系が90%を占めている。今回の満喫プロジェクトの中では、7.1万人を2020年までに約3倍の20万人に持っていくという目標を立てている。主要な交通拠点は鹿児島、宮崎、それぞれに空港、駅が1セットずつあり、空港にはLCCが入ってきており、クルーズ船の入港も今年は鹿児島港で100隻を超えている状況。スライドで錦江湾と東京湾を同じ縮尺で並べているが、非常に形が似ている。その中に、霧島連山、桜島、開聞岳等のビューポイントがある。霧島錦江湾の場合はたくさんのカルデラが雄大な火山景観を生み出している。いくつものカルデラが連なっていて、鹿児島地溝帯を構成していて、その地形は霧島錦江湾の大きな魅力の1つとなっている。

以上のことも踏まえ、コンセプトとしては非常にシンプルで、多様な火山と、その恵み。温泉、アクティビティ、食文化というものも含めた恵み。そういったものを味わうことができる。また、天孫降臨の伝説に代表されるような神話や、地球の時間という言葉でも表わされるような壮大なジオの歴史というものを体感しながら観光できるのが魅力。その中で、南九州の自然、文化、食というものをまるごと体験できるというのがコンセプトになる。

ターゲットとしては現在の来訪者の9割を占めるアジア地域を中心に集客を図りつつ、2019年にラグビーワールドカップを控えており、欧米地域の市場を開拓したいと考えている。旅行形態別では個人旅行・少人数のグループで、空港・駅から交通公共機関、レンタカー等を使用して入ってきている人をターゲットとして設定している。

今日の配布資料の中にも入っている全体の取り組みの概要について、今日は全ては紹介できないが、ファミトリップの実施をしたり、あるいはスタンドアップパドルボートの試行をしたり、地元の観光団体がロングトレイルを構想しているなど、多様な取組が進んでいる。

まずは、霧島地域・えびの高原における上質な宿泊施設の誘致について紹介したいと思う。

霧島地域は霧島連山の中でトレッキング、登山をするというのが主な利用になっている。麓に行くと霧島神宮があり、こちらも参拝客で賑わっている。霧島神宮から少し登った高千穂河原には霧島神宮の古宮の跡があり、天孫降臨伝説の場所でありパワースポットとして人気を博している。さらに奥に登ると高千穂峰があり、坂本龍馬が新婚旅行で訪れたされている。トレッキング、登山、参拝以外に牧場もあり、山々を眺めながらホーストレッキングを体験でき

る。また、えびの高原には日本最南端の屋外アイススケート場があり、11月から3月まで楽しめる。その後にはゆくり温泉に浸っていただき、夜には満点の星を眺めながら上質な時間を楽しめる。

このような上質な空間、上質な時間が味わえるえびの高原において、ステップアッププログラムにも書いてあるが、今は更地となっているホテル跡地などがあるので、そういったところの活用をしながら高級ホテルやグランピング等の施設の誘致をして、周辺のアクティビティの造成などと一体的に実施して、この地域の魅力化を図っていきたくと考えている。現在、宮崎県の主導の元、宮崎県、えびの市、環境省が実行委員会の設置に向けて検討を進めている。将来的には公募を前提とした形でまずは事業者との対話を今年度中に開始したいということで調整を進めている。その中でえびの高原や霧島錦江湾国立公園全体の魅力化を図り、海外にも通用するナショナルブランドとなる空間にしていきたいと考えている。

中部の桜島錦江湾地域については、なんと言っても桜島の眺望がある。鹿児島市の市街地からわずか15分程度で渡れる魅力的な場所。今なお噴煙を上げ、そのダイナミックな景観を楽しめる。また、景観を眺めながらシーカヤック等を楽しめる。錦江湾には300頭以上のイルカが今現在生息していると言われており、観光の途中にもイルカと出会えることができる。また、桜島では多様なアクティビティが既に用意されている。カヤックの他にも溶岩ミニトレッキング。海岸を掘ると天然の温泉が出てくる天然温泉掘りツアー。溶岩でピザ窯作りをしてピザを作る体験。錦江湾のクルーズ。世界最小のみかんと言われており桜島小みかんの収穫。世界一大きいといわれている桜島大根の収穫。レンタサイクル。夜になると火山の赤い火を探すナイトツアー。このような既存のアクティビティについても、インバウンド利用に対応しうるような磨き上げを図る観点から、地元の団体や桜島錦江湾ジオパーク、霧島ジオパークの協議会との連携を図っていきたく。地域の活力という点では、来年の3月にオープン予定の桜島新フェリーターミナルで地元のNPOが魅力的なカフェ・ショップを開店し、情報発信も行うということでクラウドファンディングも実施中。

指宿市地域については、薩摩富士とも言われる開聞岳、カルデラ湖である池田湖、3月～10月の干潮時期だけ道が現れ渡れる知林ヶ島。大地の恵みという点では、鰻温泉の近くの集落には天然蒸気カマドというものがあるが各家庭で1つずつある。これに卵や野菜を入れて蒸気で蒸して食べるという体験が今後体験アクティビティとしてできてくる予定。有名な砂むし風呂も指宿にはある。錦江湾、海の恵みということでこのような豪華な海鮮丼が食べられる。佐多岬までいくと本土最南端に到達することができる。この地域では環境省、鹿児島県、地元の南大隅町が協力をしながら一体的な利用環境の整備を図っている。岬の先の展望台については現在整備中で、来年度中には完成する予定。エントランス、駐車場、ショップなどについては既にオープンしている。このような一体的な利用環境の整備を進めつつ、周辺でも滞在型観光を推進するため、キャンプ場等の整備を地元自治体が検討している。インバウンドの利用、滞在型の観光というものを進めていきたくと考えている。

二次交通の改善については、3 地域に分かれていることもあり、霧島錦江湾国立公園の避けて通れない課題になっている。地元自治体が各コンテンツを周遊し、30 分～1 時間程度滞在できるような周遊バスの試験的運行などの取組を実施している。

引き続き、関係自治体と協力し、民間事業者との連携を深めつつ取組を推進していきたい。